

4 環境の保全に関する教育研究活動

環境教育活動

あらゆる専門分野から環境問題への教育研究を進め、環境配慮に貢献できる人材を育成する。

教育内容の学際化、高度化及び国際化を推進し、また、安全、環境及び倫理等の内容を含む多様な授業科目を充実させる。

全学教育

長崎大学では、非常に多くの環境関連講義科目が開講されています。その中から全学教育（教養教育）における授業科目のシラバスの一部を以下の表にまとめて紹介します。

さらに、他の学部等における平成20年度を含めた授業科目の内容は、各学部等のホームページ上のシラバスで知ることができます。

なお、シラバスに掲載された参考図書・文献等は、附属図書館に備え付けることとしています。

全学教育における環境関連講義科目（平成19年度シラバスより）

科目区分 （選択必修）	授業科目名・担当教員名	授業のねらいと内容
人文・社会科学 科目 （選択）	社会と歴史 （海洋の制度） ・ 片岡千賀之	〔ねらい〕 この講義では、海洋思想、海洋の利用と開発、海洋制度の歴史を概観し、海の憲法を呼ばれている国連海洋法条約の内容を解説する。また、日本の海洋制度についてもふれる。海洋をめぐる国際的な対立と合理的な利用を解説することによって国際社会に対する理解を深める。 〔内容〕 海洋思想、海洋の利用と開発、海洋制度の歴史についての概要、国連海洋法条約の成立過程と構成、国連海洋法条約の基本概念である領海、国際海峡、島と岩、大陸棚、排他的経済水域、公海、深海底、海洋環境の保全、船舶の航行、紛争解決制度を、海洋利用の実態をふまえて、概説する。また、日本の海洋制度の歴史、日本の領海、大陸棚、排他的経済水域についても概説する。
人文・社会科学 科目 （選択）	経済と経営 （環境と産業） ・ 井手 義則	〔ねらい〕 産業の発展は人間生活を豊かにしたが、環境問題が顕在化する中で、各産業には環境に配慮した展開が要請されている。そこで、産業経済社会に環境保全を組み込む視点から、産業と環境問題の関わりについて検討する。 〔内容〕 産業概念を明確にしたうえで経済発展と産業構造の変化を明らかにする。それに基づき、3つの産業部門各々の環境配慮・対応の変化状況を確認する。そのうえで、各産業分野の環境保全活動を評価する。
人間科学科目 （選択）	人間の科学 （科学史） ・ 中村 修	〔ねらい〕 科学は中立でも公平でもなく、権力に左右され、利害に振り回されて歪んで発達してきた、ということについて環境問題、食の問題、避妊など具体的な事例を挙げながら、科学の経済依存性について説明する。 〔内容〕 ・科学が発達したのになぜ地球規模で環境問題が発生したのか、科学が発達し、教育を十分にうけている日本で、

科目区分 (選択必修)	授業科目名・担当教員名	授業のねらいと内容
		<p>なぜ中絶が多いのか、わたしたちは「豊かな食」を得ているのかなど、具体的で今日的な話題を事例に、科学のありようについて議論を深める。</p>
自然科学科目 (選択)	<p>地球と宇宙の科学 (宇宙からの地球診断) ・ 後藤恵之輔</p>	<p>〔ねらい〕 今、地球上ではさまざまな問題が起こっている。土地利用の問題、植生環境の悪化、自然災害の続発、水質の悪化や水資源の枯渇、構造物の維持管理、さらには地球温暖化等の地球環境問題などである。これら諸問題の解決に向けて、宇宙から、空から、そして地上でのリモートセンシングの技術による地球診断を学ぶ。</p> <p>〔内容〕 最近の地球診断に関する話題から、宇宙からの地球診断がどのように行われているかを、講義の最初とする。ついで、NHK ビデオ「宇宙から見るふるさとの今」を用いて、九州・沖縄の衛星画像から、「宇宙からの地球診断」が身近であることを理解する。 リモートセンシングの基礎として、その定義・原理・特長を学び、地球観測衛星や高分解能衛星の実際を知ったうえで、リモートセンシング・データの収集から解析の方法を学ぶ。応用編として、宇宙や空からのリモートセンシングを用いた土地利用分類、自然災害の調査と予測、水資源の探査など、地上リモートセンシングを用いた構造物の維持管理、屋上緑化観測、近代化遺産の保存と活用などを学んだ後、最近にわかに話題となっている地球温暖化などの地球環境問題の解決に、地球観測衛星が寄与していることを述べる。</p>
自然科学科目 (選択)	<p>生物の科学 (プランクトンと海洋環境) ・ 鈴木 利一</p>	<p>〔ねらい〕 プランクトン(浮游生物)は海洋水柱中に普遍的に存在する。各々の個体は極めて小さいが、その現存量は莫大であり、海洋の環境を考える際には決して無視することができない生態群である。本講義では、このプランクトンを主体、それを取り囲むものすべてを海洋環境ととらえ、両者の相互作用について、理解し考察することを目的とする。</p> <p>〔内容〕 浮游生物の生態に関する、基本的な概念および研究成果を出来るだけわかりやすく紹介する。</p>
人間科学科目 (選択)	<p>人間と環境 (温度環境、微生物環境、放射線環境) ・ 松田 尚樹</p>	<p>〔ねらい〕 日常の生活において、温度、微生物、及び放射線・紫外線は我々が避けることのできない環境中の因子である。本授業は、これらの環境因子と人間との関係についての理解し、知識を深めることを目的とする。</p> <p>〔内容〕 温度、微生物、及び放射線・紫外線について、まず基礎を概説し、次いで人間との係り、健康への影響、及びその対処等について各論を述べる。</p>

科目区分 (選択必修)	授業科目名・担当教員名	授業のねらいと内容
自然科学科目 (選択)	地球と宇宙の科学 (地球温暖化の科学) ・ 森山 雅雄	<p>〔ねらい〕 地球温暖化に代表される熱環境問題に関わる物理学をその根本から学習する。</p> <p>〔内容〕 1．熱環境解析に必要な物理学の基礎知識の学習 2．地球表面での熱エネルギーの移動形態とその特徴を理解をする学習 3．地球温暖化、ヒートアイランドの生成要因の学習 4．温暖化防止策を理解するための学習</p>
総合科学科目 (選択)	暮らしと地球環境学 ・ 後藤恵之輔	<p>〔ねらい〕 この地球には人間のみならず生物、植物等が生息しており、互いに影響しあって生存している。その地球が危機に瀕している。温暖化、オゾン層の破壊、砂漠化等の地球環境問題によってである。しかし、地球はこのような地球規模のものだけでなく、ごみ問題等の地域の環境問題によっても次第に汚染されてきている。本授業では、これら環境問題を地球かつ地域規模で学び、暮らしの中でどう対処していけばよいのかを考える。</p> <p>〔内容〕 最近の環境問題に関する話題を題材として、環境問題が地球規模であれ、地域規模であれ、我われの「身近な」問題であることを認識することから講義を始める。 地球環境問題として地球温暖化、酸性雨、砂漠化、熱帯雨林の減少、野生生物種の減少、オゾン層の破壊、海洋汚染を取り上げ、地域環境問題として自然災害、水質汚染、地盤・地下水汚染、ごみ問題を扱って、これらを地球環境問題と絡めながら論じる。さらに都市の人口爆発、アスベスト問題、感染症も、最近の環境問題として述べる。 これら環境問題はややもすればマイナス思考になりがちだが、このことを考慮しながら、プラス思考のこととして生物生息環境の保全・再生・創造に関係するピオトープ、近・多自然型川づくり、エコロード、ミティゲーションを講義する。</p>
総合科学項目 (選択)	環境と文化 ・ 正本 忍	<p>〔ねらい〕 文化とは人間に固有の生活様式の総体をいい、知識、信仰、芸術、道徳、法律、風習などの諸要素を含んでいる。本講義のねらいは、「環境」を自然環境に限定せず、上述のような文化を「環境」として捉える見方を身につけることである。</p> <p>〔内容〕 本講義では、「環境」を自然環境に限定せず、文化環境、社会環境も含めたより広い概念として捉え、哲学、倫理、思想、歴史、文学、語学、民俗学、人類学、社会学などの角度から照射した様々な「環境」が語られる。</p>

教育学部

- ・環境教育、環境教育演習

医学部

- ・人間生物学（生態系、人口問題・環境） 環境因子系

薬学部

- ・環境衛生学、衛生薬学（健康と環境）

工学部

機械システム工学科

「エネルギーと環境」において、地球環境を強く意識した技術革新の進展を理解させ、また、地球環境保全のためのエネルギー利用方法について意識させた。

電気電子工学科

「電気エネルギー工学Ⅰ」において、環境に配慮した新エネルギー源、エネルギー蓄積技術について講義した。

社会開発工学科

安全工学セミナーにおいて安全に関する教育を行った。上下水道工学、廃棄物利用工学、自然生態学、水環境システム工学において環境に関する教育を行った。

材料工学科

環境工学、エネルギー材料学において環境に関する教育を行った。

応用化学科

安全工学セミナーにおいて安全に関する教育を行った。環境工学、環境に関する教育を行った。

環境科学部

環境科学部については、ほとんどの講義科目が環境に関連する内容で行われているため、下記のURLをご覧ください。

- ・カリキュラム改革委員会を設置し、環境に関わる人文社会的資格としての社会調査士の資格取得及び雲仙Eキャンレッジ関連科目等、教育内容充実の検討を行い、それらに対応した新しいカリキュラムが平成20年度から運用されることとなった。
(http://www.env.nagasaki-u.ac.jp/zaigakusei/h20binran_gakubu.pdf)
- ・学生の環境マネジメント能力を向上するため、市役所の監査に参加した。



2008年3月20日 長崎新聞

- ・環境マネジメント論受講学生によって、学部の研究室の環境監査を実施した。



2007年7月13日 長崎新聞

水産学部

海洋環境科学概論、水産環境経済論、環境生理学、水質環境学、生物環境学、海底環境学、海洋環境科学英語、海洋環境科学実験Ⅰ～Ⅳ、環境教育演習

生産科学研究科

【博士前期課程】

水産学専攻

海洋環境情報論、沿岸環境論、海洋環境生理学、生物環境学特論、海洋環境資源英語Ⅰ・Ⅱ（生産と環境）

【博士後期課程】

システム科学専攻

地圏環境工学、環境水理学特論、環境マネジメント

- トシステム論、環境設計学特論、物理海洋環境学、環境生体リスク解析
- 海洋生産科学専攻
 - 海洋生物環境学、海洋環境変遷論、海洋環境流体力学、沿岸環境保全学、海洋環境資源英語Ⅲ～Ⅴ
- 物質科学専攻
 - 耐環境性評価学特論
- 環境科学専攻
 - 環境哲学特論、人間生活環境学特論、環境思想学特論、環境人類学特論、地域環境、工学特論、都市環境水理学特論、地域環境分析学特論、環境材料物性学特論、地域環境計測学特論、環境政策学特論、環境経済学特論、環境社会学特論、環境マネジメント学特論、大気環境学特論、海域環境学特論、深海生物環境学特論、水圏生物環境学特論、堆積岩地球環境解析学特論、環境生物化学特論、微量環境分析化学特論、陸域生物環境学特論、環境適応学特論・環境毒性学特論

熱帯医学研究所

1. 世界保健ニーズに応える医薬品研究開発ディプロマコース (Diploma Course on Research & Development of Products to Meet Public Health Needs)

「見捨てられた病気; Neglected diseases」と呼ばれている主に途上国に蔓延する感染症などの重要性を考慮した医薬品研究開発に携わる種々の人材の育成を目的として、2007年10月1日から11月3日まで開催された。WHOの熱帯病研究教育特別プログラムの要請を受けて準備されたもので、コースディレクターである平山謙二教授(長崎大学熱帯医学研究所所長)を中心に、医薬品開発に関するすべてのプロセスを各専門家が5週間かけて詳しく講義した。このコースでは、医薬品研究開発という専門分野に関わる講義は勿論、保健研究上のさまざまな倫理にかかわる問題や、流通開始後の製品管理などについても講義し、現在の多種多様なニーズに応えられる人材の育成にも大きく寄与している。

将来の国際連携大学院構想のコアコースとして開催し、現在、長崎大学を含む4ヶ国6大学(タイ:タマサート大学、チュラロンコン大学、中国:上海第2軍医大学、コロンビア:アンチオキア大学、日本:東京大学大学院薬学系研究科、長崎大学)が協力して開催し、講義はすべて英語で行った。最新の医薬品研究開発のすべてのステップを最高の講師陣で紹介した。

2. 熱帯医学研修課程

国内の熱帯医学の研究または、熱帯地での保健医療活動に実際に従事しようとする者に、熱帯に関する正しい知識と、熱帯地における医学的諸問題についての現代科学に基づく基礎的知識が広く得られるよう、またその応用に必要な技術の研修を行うコースであると同時に、熱帯医学に関する我が国で唯一の短期研修コースである。

熱帯医学は非常に幅広い学際的な領域の知識・技術・経験が必要とされており、この研修課程によって、世界的視野から見た熱帯病の実体や、その社会的・文化的背景のみならず、国際協力の現状と重要性も理解していく。また、他の分野からのアプローチと違った、医学領域から見た熱帯地方における「環境」への理解も同時に併せ持つ貴重な人材を輩出している。

1978年に設置されて以来、今日まで351名の修了生(医師153名、看護師、保健師、助産師、薬剤師など198名)を輩出(2007年度も含む)するなど、熱帯病に携わる実践的専門家の人材育成にも大きな役割を担っている。期間は6月から8月までの3ヶ月間で、2007年度においては15名の研修生に修了証書および英文のディプロマが授与された。



様々な観点からの講義



広い視野を持った人材の育成

3. 熱帯医学修士課程

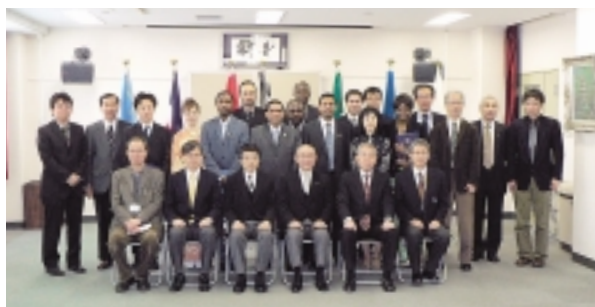
熱帯医学修士課程は、医歯薬学総合研究科の修士課程として2006年からスタートした新興感染症と熱帯医学の研究を行う我が国唯一の大学院である。1年間に渡り基礎から臨床などの実習、海外研修、応用と言った、幅広く総合的な熱帯医学に関する知識・技術・経験を学び、課程修了後には日本国内では唯一、熱帯医学修士号（Master of Tropical Medicine, MTM）を取得できる。

この熱帯医学修士課程では、医歯薬学総合研究科と熱帯医学研究所が連携し、国内のみならず海外で活躍している外国人講師も含めて、実際に現場で熱帯医学に取り組んでいる講師を招聘し、講義はすべて英語で行われている。広範囲にわたる的確な知識と経験によって対処しなければならない感染症の問題は、もはや医療分野だけではなく、「環境」や「平和」といった広範囲にわたる的確な知識と経験も重要となることから、この修士課程は国際レベルの感覚と、多岐にわたる知識と技術と実践力をも身につけた貴重な即戦力となる人材育成の場となる。

2007年度は、日本人のほかアフリカ、中南米、中東からの学生も含め13名が入学した。国内外の症例や疫学、医療政策などについて学ぶ講義や海外研修を経て、研究室に所属して修士論文を書き上げ、最終的に13名が熱帯医学修士号を取得した。



実経験に基づく貴重な講義内容



修了式

附属学校園

1. 社会3年公民

国際問題と地球市民

「21世紀の資源・エネルギー問題」

エネルギー需要が年々増加傾向にあることやエネルギーの消費が地球の環境にもたらす影響を知り、代替エネルギーの確保とともに、地球環境をどのように守っていくかについて考えを深めた。

「地球環境を考える」

危機的な地球環境の現状と環境破壊を防ぐために身のまわりでできることを考え、環境を守るための国際的な取り組みについて学んだ。

「市民が支える環境運動」

地球環境を守るために世界各国で市民により行われている取り組みや日本で現在行われている様々な環境問題について学んだ。

2. 社会2年地理

世界の中の日本

「過疎・過密問題」

過度の人口集中が原因となって起きる諸問題の1つとして、ごみ問題や環境汚染について資料を集め、環境危機を訴えるポスターを作成した。

「ナショナルトラスト」

全国で進められているナショナルトラストの事例を調べ、様々な手法での環境保全の取り組みについてまとめた。

3. 英語2年

“Can Anyone Hear Me?”

自然環境が循環していることを認識させるとともに、環境問題は最終的にはわれわれ人間に降りかかってくることを考えさせ、自然環境を大切にしよう指導した。

4. 英語3年

“Cranes and Wetlands”

北海道の釧路湿原に生息するタンチョウの保護を題材とした内容を学習し、人間の活動がいかに自然に悪影響を及ぼしているかということについて意見発表を行わせた。

5. 保健体育2年

「空気の衛生管理」「飲料水の衛生的管理」「生活にともなう廃棄物の衛生的管理」および「環境汚染と健康」について指導を行った。

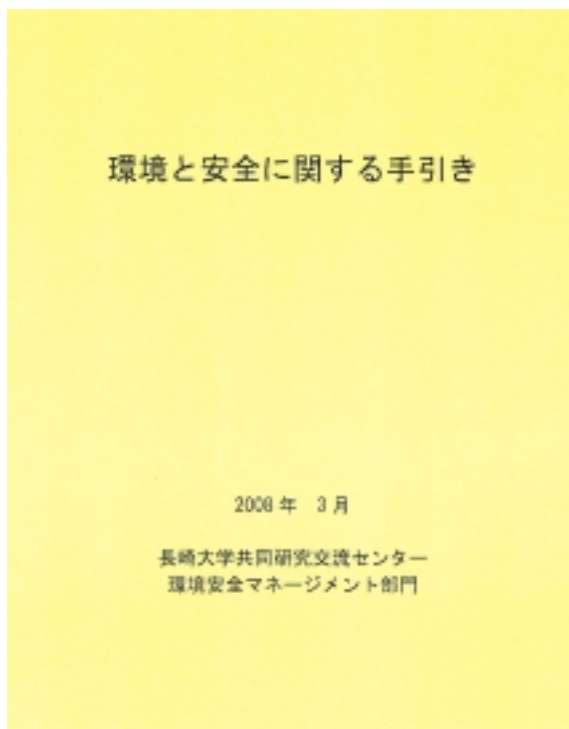
6. 「学問探求」という教育活動の中でも、自然科学系で「地球を守るのは君だ!!」「環境マネジメント入門」という講座を開設した。

共同研究交流センター

1. 平成19年4月に本学工学部応用化学科の学生を対象に、共同研究交流センターの無機系および有機系廃液処理施設の見学会を行った。学生約50名の参加の下、活発な質疑応答が行われた。

2. 平成19年4月に共同研究交流センターの機器利用者講習会を開催した。学生及び教職員合わせて110名参加の下、機器利用に係わる安全上の注意の他、廃液回収における諸注意やISO14001等について説明し、環境負荷削減についての理解を促した。

3. 総合安全衛生管理委員会監修の下、平成15年9月に作成した「環境と安全に関する手引き」の改訂を行った。



環境研究活動

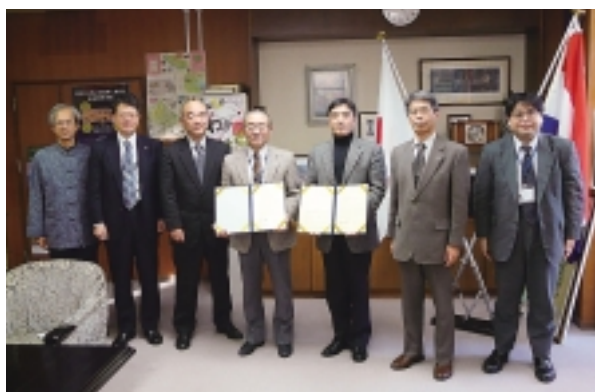
多様な専門分野が連携した環境研究を遂行する。

新たな学術協定締結大学（校）を中核とし、日本 - 台湾 - 韓国 - 中国を結ぶ環境学研究教育の交流ネットワーク形成を推進する。



吉林大学宿久高学院長が齋藤学長を表敬訪問

2008年2月13日(水)、吉林大学（中華人民共和国）と本学との学術交流協定書及び学術交流協定に基づく学生交流に関する覚書に吉林大学長の署名がなされたのを受けて、吉林大学の宿久高学院長が、本学と吉林大学協定書及び覚書を齋藤学長へ届けるために来学されました。



本学関係者との記念撮影

吉林大学は、吉林省長春市にあり、教員数約6,000名、学生数約63,500名、9学部、43学院、3附属病院、3センターがある中華人民共和国教育部直属の重点大

学の一つです。齋藤学長との懇談は、本学側から松岡理事（研究・国際担当）、小路副学長（国際担当）、環境科学部の佐久間学部長、連教授が出席して、吉林大学及び中国における環境研究や両大学間の今後の交流などについて、和やかに行われました。



齋藤学長と懇談する吉林大学宿学院長

環東シナ海海洋環境資源研究センターを国内外の海洋・水産研究機関との共同研究推進基地として活用する。

第6回東シナ海の海洋・水産科学に関する国際ワークショップを開催

2007年11月3～4日、総合教育研究棟において「第6回東シナ海の海洋・水産科学に関する国際ワークショップ」が開催されました（参加者総数105名）。このワークショップは、東シナ海の海洋科学・水産科学分野をリードする本学、琉球大学、済州大学校（韓国）及び上海水産大学（中国）などが中心となり、1997年に済州大学校で第1回を、その後2年ごとに開催されてきました。今回は、本学が取り組んでいる文部科学省連携融合事業「東アジア河口域の環境と資源の保全・回復に関する調査研究」及び科学技術振興調整費「東シナ海有害赤潮の日中韓国際連携研究」に関わる種々の調査研究、並びに「魅力ある大学院教育」イニシアティブの「海洋環境・資源の回復に寄与する研究者養成」などの人材育成事業の成果を琉球大学、済州大学校及び上海水産大学などともに更に発展させる目的で開催されました。

2日間のワークショップでは、30題を越える口頭発表と30題のポスター発表が大学研究者や若手大学院生によって行われ、東シナ海とその周辺海域（中国・韓国沿海や有明海など）の環境と生物について幅広く情

報の交換が行われました。また、新しい試みとして、海洋科学や水産学の教育システムについて討論し、研究者ばかりでなく人材育成を見据えた学部学生や大学院生の交流を一層盛んにするための方策についても話し合われました。これらの情報交換と議論を通して、東シナ海を環境を保全・回復させ、世界有数の漁場であるこの貴重な海域の生物生産力をよみがえらせるための努力が続けられています。



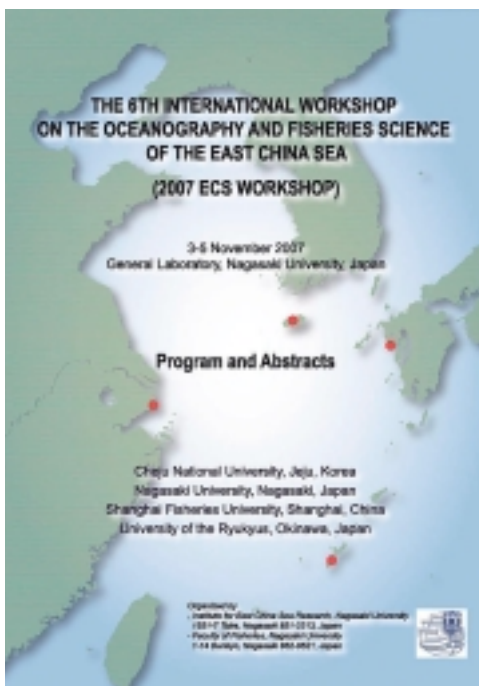
アジア各国の教育の違いを議論する様子
(学生セッション)



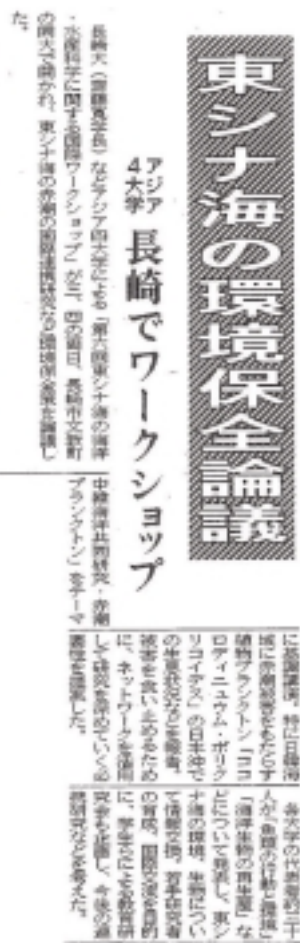
2007 ECS Workshop 記念写真



ポスター発表の様子

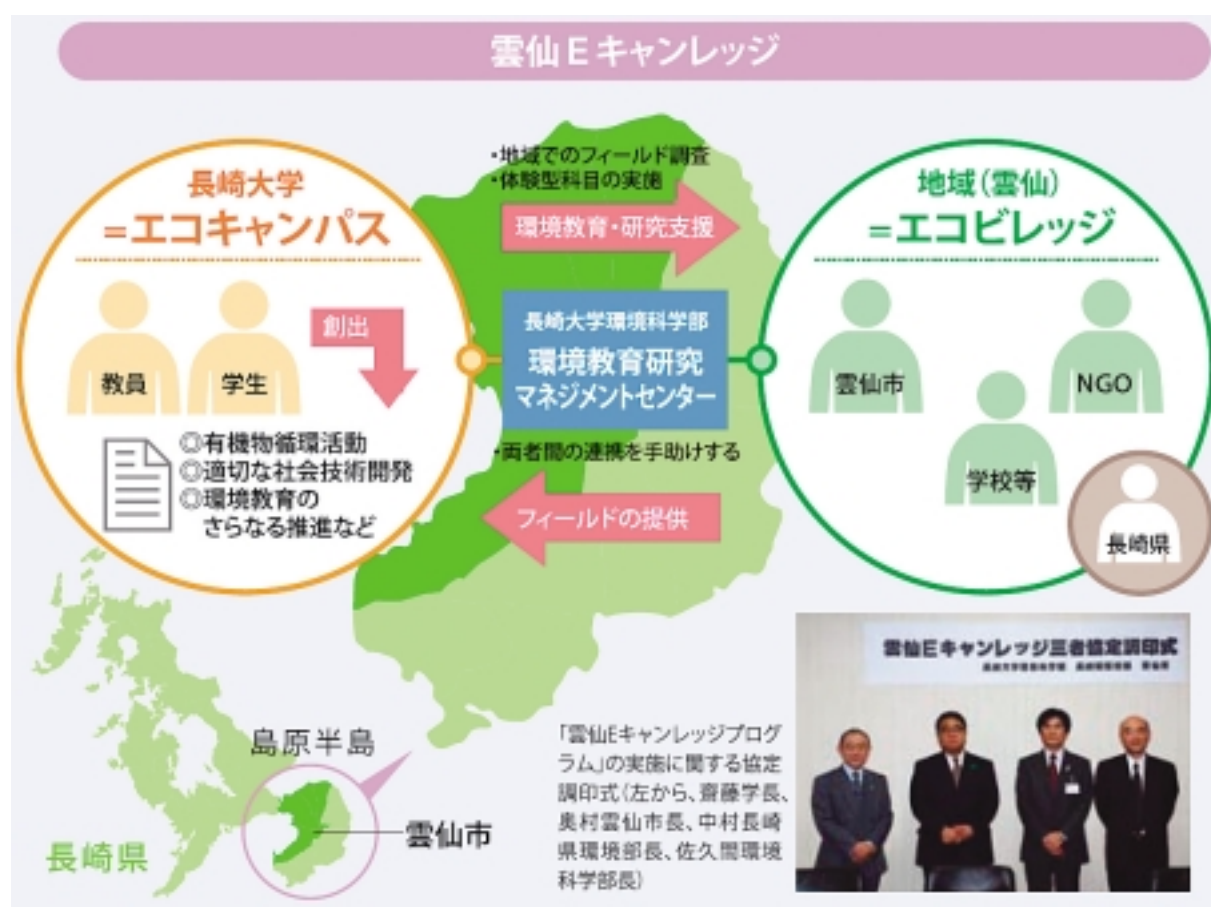


2007年11月6日 長崎新聞



実践的環境教育研究の実施拠点施設として雲仙Eキャンレジ（ECOLOGY CAMPUS VILLAGE）の整備に着手する。

2007年4月27日	雲仙Eキャンレジプログラムの実施に関する三者（長崎大学環境科学部、長崎県環境部及び雲仙市）間での協定の締結
2007年6月18日	「雲仙Eキャンレジプログラム」スタート記念シンポジウム
2007年11月26日	Eキャンレジプログラムキックオフシンポジウム
2007年2月18日	Eキャンレジに係る雲仙市役所との意見交換会



1. 雲仙Eキャンレジプログラムのためのハードソフト両面での基盤整備を進めた。

①ハード面

- ・ 宿泊施設の整備
- ・ 持続可能な開発と教育のための情報交流センターのためのセミナー室の整備

②ソフト面

- ・ 雲仙市を持続可能な開発のための教育の拠点としていくことを目指した、環境省補助事業「持続可能な開発のための教育の10年促進事業」の実施
- ・ 雲仙市における地球温暖化対策地域行動計画の作成支援

- ・ 雲仙市職員と長崎大学環境科学部職員との情報交流会
- ・ 国見高等学校での環境活動の支援 ほか

環境科学部が長崎県環境部及び雲仙市と協力連携三者間協定を締結



記念撮影



調印の様子

4月27日（金）、環境科学部は、長崎県環境部及び雲仙市と協力連携三者間協定を締結しました。宮藤学長が立ち会い見守るなか、佐久間環境科学部長と中村長崎県環境部長及び奥村雲仙市長が「長崎大学環境科学部と長崎県環境部及び雲仙市の連携・協力に関する協定書」に署名を行いました。

この協定は大学及び県・市の三者が連携・協力して、雲仙Eキャンレッジプログラムを推進していくことを主要な目的としています。このプログラムは、エコビレッジづくりとエコキャンパスづくりとを一体として進めていこうとするもので、将来的にはこの地域を環境教育及び環境施策の研究・充実を図るための拠点として形成していくことを目指したものです。このような活動を推進していくために自治体と県及び大学の間で協定が締結されることは他に例がなく、前例のない取組を進めていくことになります。

今後、雲仙市は市民と一体となって持続可能な開発のための環境政策の立案と実践を進めていきますが、長崎大学及び長崎県ではそれを支援していくことになります。また、地域でのそのような実践活動の場は環境科学部学生の体験学習の場として活用していくこととなります。

また、環境科学部では6月18日（月）に、この雲仙Eキャンレッジプログラムのスタートを記念して、「エコビレッジとエコキャンパスの出会い」と題したシンポジウムを中部講堂で開催します。持続可能な地域づくりとそのための広い意味での教育の果たす役割について、京大名誉教授内藤正明先生や国連大学高等研究所の上席研究員を交えて知恵を絞る場とします。

（環境科学部）

長崎大と県、雲仙市が連携して地域の自然環境を生かした教育研究、街づくりに取り組む

「長崎大と県、雲仙市が連携して地域の自然環境を生かした教育研究、街づくりに取り組む」をテーマとしたシンポジウムが18日、長崎市文芸ホールで開かれた。学生や行政関係者約300人が参加し、基調講演や討論会で議論を交わした。

同大環境科学部の創立十周年を記念して計画を進め、四月に県、雲仙市と協定を締結した。プログラム名は「エコロジー・キャンパス、ビレッジからの連携、開発と公共」に指

地域の自然環境生かして 教育研究や街づくりに

定されている雲仙の自然を活用した研究活動に取り組む。

シンポジウムでは、佐久間正環境科学部長が「雲仙は豊かな自然環境があり、自然豊かな場所、地域を舞台にした研究フィールドを持つことができたことはいささか、雲仙市環境科学部研究センター長で京大名誉教授の内藤正明氏が「持続可能な開発のための科学と技術」と題し、基調講演した。

内藤氏は車を走らせない地域社会など自然と共生した社会づくりの案を紹介し、風力発電などハイテクを利用した石油に代わるエネルギー開発の必要性を強調。「長崎大の計画はスケールが大きく、周囲の関心も高くなる。環境に優しいだけでなく、地産地消文化、教育、福祉、家庭とセマトで行動する必要がある。法律、条例とどう向かい合うか。機運改革特区の活用も考えたい」とアドバイスした。

今後、地元企業や環境団体も交えた協議会を設立し、本年度末までに行動計画を作成。長崎大は来年度から関連の環境科目を開設する方針。

雲仙Eキャンレッジプログラム

発足記念しシンポ

長崎大、県、雲仙市が連携

2007年6月19日 長崎新聞

「長崎大学エネルギー環境教育研究会」の活動

(URL : <http://tech.edu.nagasaki-u.ac.jp/tech/energy/home/index.html>)

「長崎大学エネルギー環境教育研究会」は、長崎県内及びその近郊において、日頃エネルギー環境教育で活躍している関連諸機関・担当者の交流促進とエネルギー環境教育の学校および地域での一層の推進を図ることを目的として2007年10月に設立された。2007年度は、

- ①エネルギー環境教育およびエネルギーに関する意識調査
- ②大学等の授業支援とその効果
- ③エネルギー環境教育のカリキュラム化の検討が行われ、16の出前授業・教員セミナーと児童・生徒の意

識・行動調査がなされた。

- ・環境保全を意思決定要素に組み入れたビジネスゲームの開発、長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、第8号、pp.1 - 10、2008年3月
- ・雲仙火山を利用した総合的な学習のための授業カリキュラムと教材製作、Cities on Volcano 5 Conference 2007年11月19日
- ・東シナ海沿岸（九州西部）の漂着物とその特性、第7回漂着物学会種子島大会、2007年10月27日
- ・インクカートリッジ漂着マップ、同上
- ・2006年夏の長崎県沿岸における流木・その他の大量漂着、漂着物学会誌、5、pp.33 - 38、2007年12月10日
- ・オゾン微細気泡による有機系土壌汚染物質の酸化処理実験、日本産業技術教育学会、49(2)、123 - 128、2007年

(関連記事は地域連携活動のページに記載)

長崎大は、資源エネルギー庁からエネルギー教育の研究、実践を推進する地域拠点大学の選定を受け、地球温暖化やエネルギー資源問題への対応を目的に、各学校への出前授業や教員研修に取り組んでいる。

地域拠点大学は二〇〇二年度からの事業で、同行からの委託で社会経済生産性本部・エネルギー



子どもたちが地球温暖化について学んだ長崎大の出前授業
—昨年7月、福岡県内—

出前授業など取り組み

エネルギー教育地域拠点の長崎大

長崎大は、資源エネルギー庁からエネルギー教育の研究、実践を推進する地域拠点大学の選定を受け、地球温暖化やエネルギー資源問題への対応を目的に、各学校への出前授業や教員研修に取り組んでいる。

地域拠点大学は二〇〇二年度からの事業で、同行からの委託で社会経済生産性本部・エネルギー

環境教育情報センターが運営。本年度は全国で二十一大学が活動。長崎大は本年度から二学期間にわたって取り組む。

同大は教育学部、環境科学部、工学部の教員、学生が連携し、幅広い分野で学校教育を支援。昨年十月にはエネルギー環境教育研究会を設立させた。複数の学部で共同研究は全国でも珍しく、これまでの各学部の支援活動を連携し、新たな研究態勢を構築する。同大は「エネルギーや資源、社会情勢、環境問題など幅広いニーズに対応し、新たな視点の学びの場を創造したい」としている。

行政、企業とも連携し、教員研修や出前授業を企画。教材を開発、授業力アップを図りたい。速上園への技術提供など長崎の新しい平和教育にな

リキュラムを作成し、学習を促進。出前授業の内容は各校の要望に応じ、研究実践の協力校も募集している。

研究と連携した教員養成のための教育学部の講義も計画。世界遺産への人材育成も視野にし、同大教育学部の藤本登准教授は「資源の枯渇に対応する意図を育てたい。速上園への技術提供など長崎の新しい平和教育にな

ると述べている。

二月十六日に佐世保市の佐世保高専で「教師のためのエネルギー環境教育実践セミナー」を開催。入場無料。問い合わせは同センター（電話03・3593・0936）。

個別研究事例

その他の新聞掲載記事より

長崎大の下町准教授ら



太陽光浄水器を開発

鏡で沸かし 滅菌に成功

2008年2月13日 長崎新聞

長大大学院・久保田さん(長崎市)

81歳で博士号



ダイオキシン抑制研究で

2008年3月14日 長崎新聞

スナメリの生活史、解明へ



離乳期の死多く原因探る

2008年3月15日 長崎新聞

長崎大学学術研究成果リポジトリ (NAOSITE) より

- ・環境研究と環境教育
 - ・環境研究と平和研究
 - ・環境リスクと責任ルールの再構築：ドイツ環境責任法をめぐって
 - ・LCA (ライフサイクル・アセスメント) と環境経済政策：CML (ライデン大学環境科学センター) 開発 LCA の視点から
 - ・適材適所の環境技術尿処理：環境の視点からの尿処理技術の評価
 - ・大村湾水質環境に関わるステークホルダーの価値構造と環境評価法の政策利用
 - ・新燃焼方式による小型焼却炉の開発
 - ・破壊された森林の原状回復に関する法的責任
 - ・多様化する環境マネジメントシステムの比較研究他
- NAOSITE には、本学で行われたさらに多くの環境関連研究成果が紹介されています。
(URL : <http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/>)

国際連携活動

国際的環境研究・教育への協力、環境問題の相互理解と情報の共有を推進する。

済州大学校に設置した長崎大学 - 済州大学校交流推進室を活用し、済州大学校との研究交流を推進する。

済州大学校イ・ジュン・ベク教授らが学長を表敬訪問

2007年9月14日(金)、本学学術交流協定校である韓国の済州大学校イ・ジュン・ベク教授、チェ・チャンムン教授、ユン・ソックフン准教授3名が齋藤学長を表敬訪問しました。イ教授らは、学生実習の一環として済州大学校学生54名を引率し、韓国済州島から2日をかけて同大学校所有船舶アラ号で長崎港に当日入港されたものです。

齋藤学長との懇談は、本学側から中田水産学部長、河邊環東シナ海海洋環境資源研究センター准教授が出席し、昨年11月に齋藤学長が同大学校を訪問し、本学として水産・海洋分野で初めて海外の研究交流拠点として設置した「長崎大学 - 済州大学校交流推進室」について、また両大学間の今後の交流などについて、和やかに行われました。



左より河邊准教授、チェ教授、ユン准教授、齋藤学長、イ教授、中田学部長

水産学部と環東シナ海海洋環境資源研究センターでは、連携融合事業の第2の拠点として上海水産大学(中国)に交流推進室を設置する。

上海水産大学(平成20年5月に上海海洋大学に改称)との間に学術交流協定を締結し、学生交流の覚書の締結に向け準備を進め、更に、共同研究を開始し、平成20年度に同大学に長崎大学の交流推進室を設置することとした。

上海水産大学(中国)と学術交流協定を締結

2007年5月18日(金)、本学は上海水産大学と学術交流協定を締結しました。上海水産大学(中国上海市)において、齋藤学長、松岡理事、石松環東シナ海海洋環境資源研究センター教授、萩原生産科学研究科教授その他の関係者立ち会いのもと、齋藤学長と潘迎捷学長が協定書に署名を行い、学術交流協定が締結されました。これにより本学が海外の大学等研究機関と締結している学術交流協定は88件となり、このうち中国の大学等研究機関とは20件目になります。

上海水産大学は、1912年に江蘇省立水産学校として設立され、校名変更等を経て1985年に上海水産大学となりました。現在は12学部、大学院博士課程6研究科、同修士課程31専攻を擁する大学です。両大学の交流は、1997年以来上海水産大学、済州大学校(韓国)、琉球大学及び本学による国際シンポジウム「東シナ海の海洋・水産科学研究に関する国際ワークショップ」を隔年で開催する等、活発な研究者交流及び共同研究等を経て、学術交流協定を締結するに至りました。今後は両大学間での水産増殖学、環境学等の分野における共同研究の実施はもとより、様々な分野での研究者交流及び学生交流の推進が期待されます。



協定書を交換し、握手する齋藤学長と潘学長

「ガラパゴス諸島植物生態画像データベース」の構築と公開

附属図書館では、2007年6月12日(火)、平成18年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)で作成した「ガラパゴス諸島画像データベース」(<http://gallery.lib.nagasaki-u.ac.jp/galapagos/>)の完成披露式を行い、報道機関へ発表しました。式では、齋藤学長から個人的な研究成果が広く社会に公開されることの意義について挨拶があった後、柴多附属図書館長からデータベースの特長が紹介され、伊藤長崎大学名誉教授からはデータベースの内容について説明がありました。このデータベースは、伊藤名誉教授が1964年以来約40年間16回にわたる現地調査で撮影した約1,300枚の写真画像からなるもので、キーワード検索や高精細画像の表示の他、3Dイメージによる地形の鳥瞰動画や、同一地点を長期間にわたって撮影した定点観測画像など

の多くの特徴をもっています。

ダーウィンが進化論の着想を得たことで知られるガラパゴス諸島は、最近では、世界的な異常気象の生物センサーとして注目されていますが、このデータベースには、すでに失われた景観も多数含まれており、植物生態学のみならず、地球環境問題を考えるうえでも、大変有益な資料として活用されることが期待されます。



ガラパゴス諸島について説明する伊藤名誉教授

大洋州諸国の予防接種事業における廃棄物処理に関する活動

大洋州の13カ国を対象とした JICA の広域技術協力プロジェクト（5年間）である「大洋州予防接種事業強化プロジェクト」（J-PIPS）において、長崎大学は技術協力契約を受託しており、プロジェクト実施にあたっては、ウイルス学分野の森田公一教授を業務主任者として専門家6名がフィジー国スバ市を拠点とし、2005年3月より活動を開始している。本プロジェクトの主たる目的の一つに、EPI 関連廃棄物処理に関する地域内研修システムの構築および対象各国における人材の能力向上がある。

2007年度の EPI 廃棄物処理に関する活動として、廃棄物処理の研修および現状調査、ソーラー焼却炉設置準備、ソーラー焼却炉のフォローアップ運行支援、廃棄物処理の技術指導などを行った。この中で、バヌアツ、ソロモン、トンガ、ミクロネシア、ニウエ、フィ

ジー、サモア等の対象各国で、EPI 廃棄物処理の講義・討論、廃棄物処理サイト訪問および実態調査を行い、特にサモア政府に対しては調査に基づき、報告書「サモア独立国 EPI 関連施設調査」をまとめ提言を行った。

参考：「大洋州予防接種事業強化プロジェクト」

本プロジェクトは大洋州諸国の予防接種事業（EPI）の強化を目指した地域全体の戦略 PIPS（Pacific Immunization Program Strengthening）を支援するために実施される事業であり、J-PIPS と称する。PIPS 遂行のために必要とされる支援のうち、J-PIPS が重点的に担当するのはコールドチェーン管理、ワクチンロジスティクス、安全注射と廃棄物処理の3つの領域における調査と各国の人的資源の能力強化への協力と、それに資する地域および国内での人材育成ソフトインフラの整備である。

海洋汚染観測の国際連携強化活動

産学官連携活動

産学官連携による環境研究を推進し、その研究成果の社会への還元をめぐる。

「TDK 寄附講座エネルギーエレクトロニクス学講座」の設置決定

工学部に平成20年4月より5年間、地球環境の負荷低減につながる電源の研究を行うため、TDK 株式会社（上釜健宏社長）からの寄附（総額13,500万円）を受け入れ、新たに先端エレクトロニクス学に関する講

座を設置しました。

この寄附講座は、産学連携によるスイッチング電源システム等に関する研究及び教育プログラムの提供を行い、この分野での人材育成に寄与すること、並びにスイッチング電源システムの技術開発等を通して、持続可能で豊かな社会の実現に貢献することを目的としています。具体的には、高性能スイッチング電源の研究開発により、電源装置の発熱等の損失を減らし、その高効率の電源システムが社会に普及することで、地球環境に影響する二酸化炭素の削減につながることを期待されています。

長崎大が「スイッチング電源」研究 省エネ効果など期待 来月から講座を設置

長崎大学工学部は電子工学分野の新たな研究拠点「TDK寄附講座 エネルギーエレクトロニクス学講座」を四月に設置する。産学連携事業として、地球環境に配慮した日本最先端の「スイッチング電源」の研究、開発を中心に取り組む。宮崎英学長は十日に同大で記者会見し、「エネルギーに関する特色のある研究、教育で社会に貢献したい」と意気込みを語った。

「スイッチング電源」は家電機器などの電気回路で、入力された電力を必要とする電力に変える際の非常用発電システム。その損失を少なくするシステム。電圧のオク、オフを自動的に小さめに切り替えることで、電力を効率的に活用する。例えば冷蔵庫などの発熱を抑える役割があり、効率的なエネルギー利用、二酸化炭素(CO₂)削減、省エネの効果が期待される。五百万円以上の節約ができるという。講座はTDK(本社・東京)の寄附による外部資金で運営。年間二千七百万円、五年間総額一億三千五百万円の支援を受ける。

長崎大学工学部長は「学術的な発展と産業界の活性化につなげる」としている。

工学部の「スイッチング電源」の研究開発の推進を専任講師に就任した。長崎大

2008年3月11日
長崎新聞

「グリストラップ浄化用システム及び資材の開発」

共同研究交流センター環境安全マネジメント部門では、長崎県研究開発ビジネス化一貫支援事業の一環として、「グリストラップ浄化用システム及び資材の開発」のための共同研究を長崎洗管工業株式会社と行った。その結果、優れた油脂分解能力を有する菌株

を環境試料中より単離し、保存した。特に優れた能力を有する菌株については、遺伝学的、生態学的知見から同定を行い、その油脂分解特性を精査し、各種安全性を評価して製品化に向けた準備を整えた。さらに現場に投与した際、微生物が実際に活動していることを遺伝学的に検出する手法を確立した。また、優良株を包括固定した場合にも十分に油脂分解能力を発揮することを確認した。

長崎出島サイエンスカフェ - 長崎市中央公民館との共催 -

2007年10月11日、長崎市出島の旧長崎内外クラブにおいて、長崎市中央公民館との共催事業「長崎出島サイエンスカフェ」が開講されました。

お茶を飲みながら科学の最前線について学びあうというもので、第1シリーズの今回は「長崎発の環境教育」というテーマで、2008年2月8日までに計8回開催されました。



イタイタイ病について語る齋藤学長



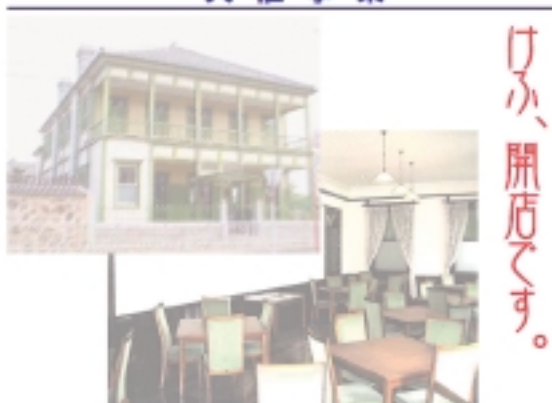
初日のサイエンスカフェの様子



環境知について語る谷村環境科学部教授

(長崎出島サイエンスカフェの概要)

国立大学法人 長崎大学  長崎市 中央公民館
共催事業



時間をこえて、空間を超えて—
再び出島の中で学びあう、科学の最前線。

長崎出島サイエンスカフェ

【第1シリーズ】長崎発の環境教育

2007年10月11日(木)～2008年2月8日(金)

15:30～17:00(計8回開催)

場所: 旧長崎内外クラブ(出島内/出島入場料は無料)

長崎出島サイエンスカフェ 「長崎発の環境教育」プログラム

期日	テーマ	講師
2007年 10月11日 (木)	オープニング・トーク 出島で学ぶ・歴史から学ぶ「環境知」	齋藤 学 (長崎大学長) 谷村 賢治 (環境科学部)
10月19日 (金)	いにしへの「海の土」から今を語り継ぐ —地質科学からの環境知	松岡 勲光 (産業科学部地質環境研究センター)
11月9日 (金)	長崎産物から考える環境問題	二階 高穂子 (大学附属長崎学総合研究センター)
11月22日 (金)	ガラスボスから環境を考える	松岡 勲光 (産業科学部地質環境研究センター)
12月7日 (金)	諺草津平野から環境を考える	松岡 勲光 (環境科学部)
12月21日 (金)	長崎発「レノ島」の歴史を知っていますか? —環境問題を身近なところから解決する—	谷村 賢治 (環境科学部)
2008年 1月28日 (金)	長崎海上国の都市化とゴースト —ホテルの現状から—	藤原 美智代 (大学附属長崎学総合研究センター)
2月8日 (金)	環境光楽園ドイツに学ぶ	藤野 清隆 (教育学部)

定員: 40名(申し込み多数の場合は抽選になります)
 要講料: 2,400円(テキスト代)
 申し込み方法: 住所、氏名、電話番号(届間に連絡がとれるところ)、年齢をお書き添えのうえ長崎市中央公民館へファックスで御送信下さい。また、電話による受付も可能です。
 長崎市中央公民館 〒850-0874 長崎市魚の町5-1
 電話: 095-825-1948 ファックス: 095-820-2605

地域連携活動

環境保全等に関する知識・技術を発信し、地域との連携・コミュニケーションを推進する。

環境教育研究における地域連携のコーディネートセクションとして、環境教育・研究マネジメントセンターを開設する。

環境教育・研究マネジメントセンターの開設

環境科学部に環境教育研究マネジメントセンターを開設し、7人の教員がセンター職員を兼務することになった。同センターが企画運営についてコーディネートしながら雲仙Eキャンレッジプログラムを推進している。

長崎大学環境科学部
環境教育研究マネジメントセンター
(ERMAC)

目的

地域の行政、研究機関、教育機関、市民団体等と連携した環境教育研究に関するマネジメント活動を活性化することを目的とします。

活動・業務内容

- (1) 環境に関する共同研究の実施に関すること
- (2) 市民を対象とした環境教育の実施に関すること
- (3) 環境マネジメントシステムの構築運営に関すること
- (4) その他センターの目的を達成するために必要な業務

活動・業務内容

センター長	早瀬 隆司 (人間社会環境学系 教授)
副センター長	馬越 孝道 (環境保全設計学系 准教授)



2007年7月3日 長崎新聞



2007年11月30日 長崎新聞

環境科学部10周年記念事業

環境科学会2007年会開催

日時：2007年9月10、11日
 場所：長崎大学総合教育研究棟
 主催：社団法人環境科学会
 特別講演：「環境中のカドミウムと人の健康」
 講師：齋藤 寛 学長

この学会は環境科学部10周年を記念して誘致され、環境科学（環境リスク、環境動態、地球環境問題、環境情報、市民活動、生態系保存、環境計画・評価、廃棄物・リサイクル）に関する一般報告や、学会賞受賞講演、特別講演など、環境科学の研究における最先端の知見が交流され、環境科学部の次の10年間の課題が模索された。



9/10 (月) 環境科学会年会 1日目
 ○一般講演、一般シンポジウム、学術賞受賞記念講演シンポジウム
 会場：長崎大学校舎 1階 国際会議場（人財・産業力の増進からの持続的発展に関する研究）
 2007年度 東京工業大学校舎 1階 国際会議場（環境アセスメントの普及と発展）
 ○ポスターセッション、総会、表彰式
 学術賞受賞記念講演 齋藤 寛 長崎大学学長 「環境と人間の共生と持続的発展」
 特別講演 齋藤 寛 長崎大学学長 「環境と人間の共生と持続的発展」
 ○懇親会

9/11 (火) 環境科学会年会 2日目
 ○一般講演、奨励賞・論文賞受賞記念講演、シンポジウム、ポスターセッション、エンタテインメント

市民公開講演会

日時：2007年9月9日(日)14：00～17：00
 場所：長崎ブリックホール・国際会議場
 演題：「パラダイムの変化 都市から地方へ」
 講師：鈴木基之（環境科学会会長・中央環境審議会会長）

対象：行政機関、一般市民、学内教職員、学生、院生
 （参加費無料）

主催：長崎大学環境科学部・社団法人環境科学会

今、グローバル化が進む一方で、「地方」がクローズアップされている。大都市への集中が成長のシンボルであった20世紀から、地方を見直し、持続可能な社会、真のゆたかさとは何かを考える21世紀型の生き方へのパラダイムの変更が強調され、低炭素社会、循環型社会、自然共生社会に向けた地方の取組への大きな期待が明らかにされた。

記念講演

日時：2007年9月29日(土)14：00～15：00

場所：長崎大学中部講堂

演題：「環境科学に期待されるもの
 - 環境政策と環境科学 - 」

講師：浅野直人（環境科学会元会長・福岡大学法学部教授・中央環境審議会委員）

対象：学内教職員、学生、院生、一般市民
 （参加費無料）

日本の環境政策の歴史を概観し、中央環境審議会委員の経験を踏まえて第三次環境基本計画策定の経緯や21世紀環境立国戦略（2007年6月1日閣議決定）について概説された。また、環境科学部10周年への問題提議として、環境科学における現場の大切さ、学際協力の必要性を具体的に示し、持続的な社会の実現に向けた取組の方向性を示唆した。



熱心に聴講する参加者

環境科学部創立10周年記念式典・祝賀会

記念式典では、内外関係者約150名が参加し、佐久間環境科学部長の式辞の後、永山賀久文部科学省高等教育局国立大学法人支援課長が祝辞を述べられました。引き続き、高柏園淡江大学副学長、西岡武夫氏ら5人の国会議員、長崎県知事（代読）、長崎市長（代読）及び福地茂雄アサヒビール株式会社相談役（現NHK会長）から祝辞が述べられた後、齋藤学長と山口睦環境科学部同窓会緑友会会長から挨拶がありました。

式典の後開催された祝賀会では、各界からの祝辞の後、鏡開きが催され、環境科学部の10年の歩みを語り合い、浦晟放送大学長崎学習センター所長の万歳三唱で盛会のうち終了しました。



挨拶を述べる山口睦環境科学部同窓会緑友会会長



式辞を述べる佐久間環境科学部長



左から永山文部科学省高等教育局国立大学法人支援課長、齋藤学長、佐久間環境科学部長、中村長崎県環境部長、中村環境科学部教育後援会会長、山口環境科学部同窓会緑友会会長



祝辞を述べる福地アサヒビール(株)相談役



乾杯の挨拶を述べる浅野直人福岡大学法学部教授

九州地区国立大学連携事業 - 防災・環境ネットワークシンポジウム2007・イン・ナガサキを開催

8月31日(金)、「九州地区国立大学連携事業 - 防災・環境ネットワークシンポジウム2007・イン・ナガサキ」を開催しました。

このシンポジウムは、(社)国立大学協会九州地区支部会議の協議を受けて、九州地区の11国立大学の連携事業として企画されたもので、第1回目の今年は長崎大学の全学教育講義棟を会場に、九州地区の「防災・環境」をテーマとして研究者や行政関係者など約280名が参加し開催されました。

シンポジウムでは、午前中は各大学の研究者から九州地区における過去の各種災害と今後の課題について講演があり、午後からは渡邊淳文部科学省研究開発局地震・防災研究課防災科学技術推進室長から「文部科学省における防災科学技術の概要について」と題しての講演がありました。また国土交通省、関連企業及びNPOの専門家から行政、民間、NPOの防災・環境への取組みについて、それぞれ発表があり、パネルディスカッションでは、防災・環境ネットワークの今後の活動・取り組むべき課題について活発な討論が行われました。

また、シンポジウムの最後に「防災・環境ネットワーク長崎宣言」と題して、それぞれの大学の特徴を生かし地域性を考慮して、「九州は一つ」という理念のもと「連携」をキーワードに、(1)大学間の連携、(2)地域(住民、NPO等)との連携・地域への貢献、(3)行政との連携、(4)「姿なき研究所」の設立の4項目について積極的な活動を推進するとの宣言を採択し終了しました。

その他、別会場では各大学・行政機関等のブースが設けられ防災対策の機材、パネル、資料等の展示があり、参加者は熱心に見入っていました。

また、会場の外では、長崎市消防局から地震体験車のデモンストレーションがあり、参加者の他に学生・一般人も多数体験し、「防災の日」が翌日ということもあり、関心の高さが伺えました。

(総務部総務課)



歓迎の挨拶をする谷山長崎大学理事



開会挨拶をする菅沼宮崎大学理事



開催趣旨説明を行う有川九州大学理事



熱心に聴講する参加者



講演を行う渡邊室長



パネルディスカッション

**九州の11国立大
長崎で意見交換**
初の防災・環境シンポ

九州地区十一の国立大が合同で企画する「防災・環境ネットワークワークショップ」2007・イン・ナガサキ

九州の国立大が連携して取り組んだ「防災・環境ネットワークワークショップ」長崎市文教町、長崎大



長崎大の谷山純太郎理事が「九州の国立大が連携して取り組んだ「防災・環境ネットワークワークショップ」長崎市文教町、長崎大

「災害の日」とあわせて、「九州地区における過去の各種災害と今後の課題」と題し、研究者約二十人が登壇。岡大の高橋和雄教授が雲仙・普賢岳噴火災害からの復興への取り組みを、ほかの災害に

応用することなどを提案した。続いてパネル討論があり、災害時に各大学、各分野の専門家が協力して研究を進める「さまざまな研究所」の構想について協

議。最後に長崎宣言として、「大学間の連携」「地域との連携」「地域への貢献」「行政との連携」「さまざまな研究所の設立」の四つの活動を推進する決意表明をした。

2007年9月4日 長崎新聞

九州地区国立大学連携事業

防災・環境ネットワーク シンポジウム 2007・イン・ナガサキ

「防災の日（8月1日）を
むかえるにあたり、
九州地区の国立大学が連携して
取り組むべき今後の防災対策や
環境問題について
学術的・専門的な立場から
意見交換を行う。

平成19年 **8月31日** 金 **9:30～17:10**
長崎大学全学教育開発棟201講義室
〒852-8521 長崎市文教町1-14
<http://www.nagasaki-u.ac.jp/guidance/access.html>

プログラム

- 9:30 開会式
- 9:45 九州地区における過去の各種災害と今後の課題
○1994年鹿児島県高橋火・1997年法水本土石炭・1999年不知火直瀬・2006年福岡県西の方沖地震
2006年台風14号洪水等
- 13:30 九州地区における行政等の防災・環境への取組み
○文部科学省・国土交通省・企業・NPO
- 16:00 パネルディスカッション
○長崎宣言・大学連携による「さまざまな研究所」構想
内容 ①大学間連携のあり方 ②行政との連携方策 ③「さまざまな研究所」 ④地域との連携・地域への貢献
- 17:00 閉会式 防災・環境ネットワーク長崎アピール発表
※地盤体験車がデモンストレーション 11:00～16:00 全学教育開発棟

参加費 無料

〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学総務課 庶務室 TEL095-819-2016 FAX095-819-2024 E-mail stunskofm@nagasaki-u.ac.jp

第3回長崎大学環東シナ海海洋環境資源研究センター市民講演会 “危機遺産ガラパゴスの昔と今”を開催

2008年2月16日(土)、総合教育研究棟において「第3回長崎大学環東シナ海海洋環境資源研究センター市民講演会”危機遺産ガラパゴスの昔と今”」が開催されました(参加者総数56人)。今回は、1978年に世界自然遺産第1号として登録され、現在は危機遺産リストに入っているエクアドルの「ガラパゴス諸島」が直面する問題について、また、外来種の移入及び不法漁業等の現状報告について講演がありました。まず、チャールズ・ダーウィン財団GAである環東シナ海海洋環境資源研究センターの松岡センター長による開会の挨拶の後、諫早自然保護協会の陣野信孝会長らによる昨年のエコツアーで見た動植物の報告について、WWFジャパンの小森繁樹氏によるJICAプロジェクト「海洋生態系保全」に向けた日本の貢献について、昨年のJICA専門家として現地で指導にあたった水産学部の阪倉准教授による海洋生態系の現状と保全の様子について、チャールズ・ダーウィン財団GA、NPO法人日本ガラパゴスの会会長でもあり、ガラパゴス諸島の植物研究第一人者の伊藤秀三長崎大学名誉教授によるガラパゴスの昔と今について、講演がありました。講演後、同月に「第16回松下幸之助花の万博記念賞」を受賞された伊藤名誉教授に対して、チャールズ・ダーウィン研究所のDr. Graham Watkins 所長から届いたばかりの祝辞が会場で披露され、花束贈呈が行われました。最後に、齋藤学長から「長崎大学は人間と環境の健康を守る科学を積極的に推進していきます」との総括があり、市民講演会は幕を閉じました。会場には多くの長崎県民の皆様にお越しいただき、大きな成果を上げることができました。今後もセンターではこのような市民講演会を続けていく所存です。なお、ガラパゴスの動植物や過去の画像は本学附属図書館ホームページで御覧いただけます。



開会の挨拶を述べる松岡センター長



質問に答える WWF ジャパン小森氏



質問をする中田水産学部長



第16回松下幸之助花の万博記念賞を受賞された
伊藤秀三名誉教授



総括を述べる齋藤学長

長崎大学エネルギー環境教育研究会の地域連携活動

(関連記事は環境研究活動のページに記載)

長崎大学エネルギー環境教育研究会の活動の中で、教育学部が中心となった連携活動は10件であり、その中で特筆すべき内容は以下のとおりである。

- ・エネルギー関連施設見学(松浦火力・天山揚水発電所、上五島国家石油備蓄基地)
 連携機関：(社)九州経済連合会九州エネルギー問題懇話会
 参加者：各17名(教育・工学部)
 開催日：2007年9月25日、12月4日



- ・教師のためのエネルギー環境教育セミナー in 佐世保
 連携機関：資源エネルギー庁、(財)社会経済生産性本部エネルギー環境教育情報センター、佐世保市役所環境部、(社)九州経済連合会九州エネルギー問題懇話会
 参加者：60名
 開催日：2008年2月16日



サイエンスワールド in 佐世保

長崎大学教育学部の学生と教員が主催して、9月23日に佐世保市で開催したサイエンスワールド2007では、エネルギーや環境に関する内容として、漂着ゴミの展示、地球温暖化に関する実験、各種発電体験等の市民参加型学習イベントが行われ、約450名の参加者を得た。



また、同様の事業が、10月27日に壱岐市(参加者：約100名)で、2008年2月27日に長崎市池島(参加者：約40名)開催された。

出前授業

省エネルギー・資源、地球温暖化防止に関連する出前授業や教員セミナーが、教育学部教員によって多数開催された。



福岡県宇美町立桜原小学校での授業風景(7/5)



五島市立岐宿小学校での授業風景(11/14)

漂着ごみ観察 環境問題学ぶ

長大大学院の由比さん講師に

五島・岐宿小6年生



漂着したごみを拾い上げて観察する児童
—五島市岐宿町、浜田海水浴場

「五島」五島市岐宿町日、漂着物を用いた環境 院生、由比良さん講師の市立岐宿小（矢口進校）学習に取り組んだ。長崎 師を務め、海辺で漂着ごみ六年生十八人は十四 大大学院教育学研究科のみを拾い集めたり観察して学んでもらうこと企画

て、五島の自然環境への影響を深めた。

由比さんは、九州大、東京大、国などの研究チームが回りで着手した地球環境問題対応研究「市民と研究者が協働する東シナ海沿岸における海洋漂着ごみ手帳実験」（本年度から三カ年）に協力しており、地元の子どもたちにも環境について学んでもらうこと企画

二校時目は、近くの浜田海水浴場に集まり、砂浜には壊れた玩具、発泡スチロール、医療廃棄物、使い捨てライターなどのほか、韓国や中国のペットボトルやスプレースプレーなどが打ちこがっており、児童は拾い上げた製造国を確認するなどして観察。洋浦航平君（二）は「外国のごみが多い。でも捨てさせないようにするにはどうしたらいいんだろ」と話した。

由比さんは奥平下児童館で「漂着ごみ」観察活動を通じて、子どもたちに「漂着物も大切なんだよ」とも楽しい。君たちも自然な海の研究者になれる」と語り掛けた。

2007年11月15日 長崎新聞

「漂着物博士」目指しお勉強

漂着物の漂着メカニズムを探り、海岸漂着ごみ予報の確立を目指す「五島博士プロジェクト」に参加する長崎大学の中西弘樹・教育学部教授らは14日、五島市立岐宿小（矢口進校）の6年生18人を対象に「漂着物博士になろう」と題する授業を行った。



中西教授（右）から漂着物について説明を受ける児童ら

国土交通省と合同で実施する五島沿岸への漂着物の調査を担当する長崎大は、地元の協力への感謝

注射器や筆ヒンなど医療廃棄物もかなりあり、子供たちは「漂着ごみを集めて回収するのは大変そうだな」と思っている。中には「漂着ごみは、地元の環境を汚す原因の一つなんだよ」とも話した。

2007年11月15日 毎日新聞

水産学部公開講座「環境共生の水産学
持続可能な海と魚の利用」

平成 19 年度
長崎大学水産学部公開講座
「環境共生の水産学—持続可能な海と魚の利用をめざして」

海の栄養分やプランクトンを運ぶ流れなどの環境、海食物連鎖の基礎となるプランクトン、人工衛星を利用した環境やプランクトンの測定、さらには生態系の保全を考えた魚の利用などについて、それぞれ分かりやすく話し、これからの海と魚の利用のあり方を一緒に考えてみましょう☆

演 題

- ☆ 海の流れと生物：環境を大切にすることの意味
- ☆ 海の生産を支えるプランクトン
- ☆ 宇宙から見た海の環境とプランクトン
- ☆ 生態系にやさしい魚の利用

日時：H19 年 12 月 15 日(土)13:00～16:00
場所：長崎大学総合教育研究棟 2 階 208 号
対象：市民一般(中学生以上)
受講料：無料(お申し込み不要)
* 問い合わせ：番095-819-2793 長崎大学水産学部総務係
☆多数のご来場お待ちしております☆



上映会風景

「不都合な真実」長崎大学中部講堂 入場者

日 時	入場者数	
6月23日(土)	11:00～	174人
	14:00～	172人
6月24日(日)	11:00～	181人
	14:00～	184人

大村市民の環境意識調査

「不都合な真実」映写会の開催

アル・ゴア米国元副大統領が出演するドキュメンタリー映画「不都合な真実」は、地球温暖化問題の重要性を一人でも多くの方に伝えようとして作成されたものである。環境科学部の教員2名が理事となっている環境カウンセリング協会長崎が、長崎市内3ヶ所、佐世保市内1ヶ所で計11回の自主上映を行ったもので、話題の映画ということもあり、一般市民の関心も高く、入場者総数は2,494人であった。上映後の反応も大きく、多くの市民が温暖化に対する問題意識を持つ効果的な機会となった。

共同研究集会の開催

「リモートセンシングおよびGISを用いた社会環境要因に帰する感染症対策への適用研究」

期日：2008年2月21日(木)、22日(金)

場所：長崎大学熱帯医学研究所大会議室・研修室

主催：長崎大学熱帯医学研究所環境医学部門
社会環境分野（2008年4月より国際健康開発政策学分野に名称変更）

今や感染症は、世界規模での環境変化や今まで考えられなかったような様々な社会環境要因によって、世界規模で総合的に対策を行わなければならない問題となりつつあり、種々の要因を総合的に解析・調査し、様々な要因がどのように感染症の拡大に寄与しているかを詳細に把握しなければならない。

この共同研究集会では、GIS（地理情報システム）と衛星データを用いたリモートセンシングの両技術が、いかに社会環境変化と感染症の拡大を効率よく捉え、その関係を把握できるのかを試みた数例の研究内容を、2日間に渡り報告した。発表内容としては、衛星データによる環境変動の把握、およびその保健医療への適用、日本住血吸虫症などの感染症の疫学的解析、緊急人道支援活動における活用事例などについて紹介した。

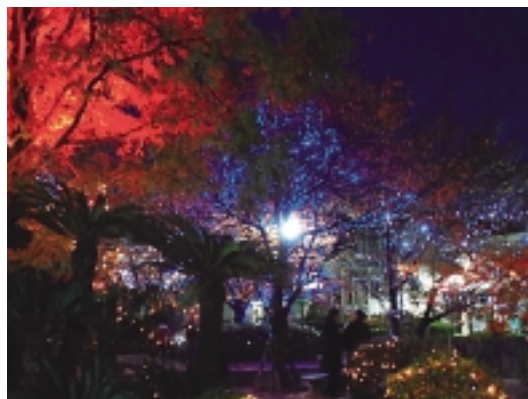
このことによって、一般市民を含めた地域の人々に、長崎大学が行っている、あるいは関係している研究について広く知ってもらい、社会へ研究成果を還元する貴重な場を提供することができた。なお、この研究集会の内容は熱帯医学研究所「研究叢書」として出版し、より多くの方に研究成果を知ってもらうこととした。



電力の有効利用

11月30日(金)、留学生センターでは、イルミネーション点灯式を行いました。このイルミネーションの装飾は、式の挨拶の中で齋藤学長が(1)留学生の心を慰めるとともに、(2)附属学校生徒の皆さんの心も癒し、(3)市民の皆様にも長崎大学を再認識していただくこと、さらに(4)原爆で尊い命を失った方々を忘れることなく、原爆被災後の回復と再生を認識するためのもの、と述べたように、母国を離れ慣れない日本で年末年始を過ごす外国人留学生たちの心を癒し暖かい気持ちを抱いてもらうとともに、一般市民の皆様へも暖かい灯火を届け大学をアピールするために、留学生センターが今年度から設けたものです。

参加者のカウントダウンの掛け声とともに、齋藤学長、小路留学生センター長、SUNG Suk-Hoさん（長崎大学留学生会副会長）のスイッチオンでイルミネーションが点り、参加者の大きな歓声につつまれました。また、齋藤学長から参加者に飲み物が振る舞われるとともに、長崎青年会議所等からの寄附により、ボランティアのサンタクロースから子供たちや留学生にお菓子が配られました。さらに、「長崎大学龍踊部」の演舞が披露され、会場は大歓声につつまれました。当日は、附属学校の生徒などの子供たち約50名を始め、一般市民、学生、教職員ら約150名が参加してイルミネーションを楽しみました。



留学生センターイルミネーション点灯



「長崎大学龍踊部」の演舞